

実験哲学のなかの認知と認識

オーガナイザー

太田紘史（東京大学大学院総合文化研究科）

提題者

飯島和樹・太田紘史（東京大学大学院総合文化研究科）

飯塚理恵・片岡雅知（東京大学大学院総合文化研究科）

渡辺匠（東京大学大学院人文社会系研究科）

哲学者は、特定の主張を支持あるいは棄却するうえで、しばしば関連する思考実験に対する直観的な判断に訴えてきた。実験哲学は、そういった哲学的思考実験に対する非哲学者の直観的判断のあり方とそれに影響する要因を探ろうとする研究である。

このような研究がとりわけ興味深いのは、被験者のなす直観的判断が哲学者の予想しない仕方で方向付けられうるという事実が判明してきたからである。例えばある実験では、被験者はある行為者についてのシナリオを提示される。そのシナリオではその行為が有害（または有益）な副作用を持つと設定されている。すると被験者は、その副作用が有害であるようなシナリオを提示されるときのほうが、「行為者は副作用を意図的に引き起こした」と判断する傾向にあることが判明している（副作用効果）。被験者の判断におけるこのような効果は、意図の帰属に限らず、知識の帰属に関しても見出されている（認識的副作用効果）。さらに別の種類の研究からは、自由意志の帰属が、提示されるシナリオの具体性によって左右されるという結果も得られている。

しかし、こういった直観的判断にまつわる現象が哲学的な議論とどのように関わりあうのかは明らかではなく、そしてそもそも、こういった現象の背後にある認知において一体何が起きているのかについても、多くの点が未解明のままである。

今回のワークショップでは、上記のような心理的概念（意図）、認識的概念（知識）、形而上学的概念（自由意志）が、人間の認知においてどのような働き方をしているのか、またそれが哲学的な議論にとってどのような意義を持つのかについて、討議したい。

まず飯塚と片岡の発表では、知識帰属における副作用効果が認識論的な知識の理論に対して持つ意味合いについて検討する。続いて飯島と太田の発表では、意図帰属における副作用効果を題材に、その認知的な本性についてどのように理論化するのかについて検討する。最後に渡辺の発表では、自由意志についての信念がどのような行動上の効果を持ち、そしてそれがどのような認知により媒介されているのかについて、実験的な研究成果を報告する。